



大学生生活の迷い方

女子寮ドタバタ日記

まきたなこ
蒔田直子(同志社大学松蔭寮寮職員)著

同志社大学松蔭寮は、1951年に寺町通の新島旧邸の北で同志社大学に学ぶ女子学生寮として始まり、64年の長きにわたって賑やかな暮らしの場であり続けている。学生たちの反乱の残り火の中で、自治寮の看板を掲げた松蔭寮に「寮母」として迎えられる36年。寮生たちと笑ったり怒ったり、一人ひとりのさまざまな危機に、ただおろおろと横気をもむ日々はほんの数年にしか感じられない。本書は10代の現役寮生から70代まで、松蔭寮で暮らした17人の女性たちと「謎に満ちた？」女子寮の日々

著者より

とその後を編みこんだ。若い人たちに「転んでもこけても大丈夫。あなたが、そのまんま生きている。たつたひとりのあなたは大切ナリ」という伝言をこめて。

緊張と期待で寮のドアを開けると、新人生たちからは生まれて育つた遠い場所の空氣がいっぱいにたちこめる。その日から、何度も躓いたり転んだりしながら、大人への扉を開いていく。勉強にバイトにサークルに、恋も留学も夢見てトライし、いつも元氣に明るい絵に描いたような女子大生……というわけにはいかない。今どきめずらしい二人部屋、深夜の寮会。自分たちのことは話し合つて自分たちで決める「はずの自治が、ときに苦しみの種になる。無駄に思える時間を過ごし、人の熱に満ちた寮の暮らし。奨学金とバイトで一所懸命自活する寮生たちが、今も昔も同志社のたいせつな宝物であつてほしい。

戦後日本思想と
知識人の役割

世界思想社

戦後日本思想と 知識人の役割

出原政雄いずはらまさお
法学部教授
和歌山大学
教育学部
望月詩史もちづきし
法学部助教
他著

本書は、本学人文科学研究所設置の研究プロジェクト「戦後日本思想の総合的研究（2010年4月～2013年3月）」の成果論文集である。「第一部・天皇制・ナショナリズム・アジア」（全四章）、「第二部・平和思想・市民主義・社会科学」（全三章）、「第三部・自由主義と変革思想」（全三章）、「第四部・戦後文学の思想」（全二章）、「第五部・福祉・ジェンダー・反戦・沖縄」（全四章）の五部構成、全一六章から成る。

本書は、戦後に活躍した知識

望月詩史より

人の役割に注目したうえで、次の編集方針に基づきまとめられた。第一に戦前・戦中と戦後の相互関係を念頭に置くこと、第二に1950年代の言論活動に着目することである。昨今の政治状況を鑑みると、戦後の価値の真価が問われた時代である1950年代と重複する面が少なくない。この時代の知識人の役割を問い直す作業は、現代における「行動する知識人」の復権の条件を探ることにもつながる。

一口に「戦後日本思想の解明」といっても、その切り口は数多く存在し、本書で取り上げられなかった人物やテーマも多い。それらは漸次、継続研究会（戦後日本思想の諸相）で取り組んでいる最中である。そもそも、本研究プロジェクトは、短期間での完結を前提に着手したものである。上記研究会終了後は新たな研究会を立ち上げて活動を継続する予定である。本書は長期に亘る研究プロジェクトの第一歩を刻むものである。



商品と社会

— ランドマーク商品の研究

川満直樹（大学商学部准教授）編著

本書は、同志社大学人文科学研究所第18期第18研究会の研究成果の一部であり、同研究会がこれまで刊行してきた石川健次郎編著『ランドマーク商品の研究①』『⑤』（同文館出版）に続くものである。

高度経済成長期以降、日本では多くの商品が登場してきた。代表的なものとして1960年代の「三種の神器」：白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫や1970年代の「3C」：カラーテレビ・カー・クーラーなどがあげられる。それら商品が、新しいライフスタイルを提供し、生活を大きく変えたことは誰もが否定しないであろう。また、

それら商品の登場は、私たちの生活を変化させただけではなく、価値観にも影響を与えた。

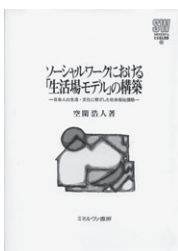
このような生活の変化、そして私たちが生きる社会の変化をどのように説明したらよいのだろうか。私たちの生活や社会は時間が続く限り変化をしていくその変化の一面を「商品」という視点・商品と生活者、商品と社会など——から見ると何が見えてくるのだろうか。

本書では、温水洗淨便座、トランジスタラジオ、パチンコの三つの商品を取り上げ上記の観点より分析を試みた。また、本書はすでに刊行された5冊の『ランドマーク商品の研究』と異なり、先に示した観点を念頭におきつつ5W1Hの視点から商品进行分析し、それに加えて国際比較の視点も取り入れ「商品と社会」の関係について検討している。

本書が、当然のように使用している商品が我々の生活にどのような影響を与えているのかを考えるきっかけになれば幸いである。

著者より

著者より



ソーシャルワークにおける「生活場モデル」の構築

日本人の生活・文化に根ざした社会福祉援助
空閑浩人（くがひろと）
（大学社会学部
博士後期課程教授）著

本書の出発点は、筆者が障害者福祉施設の職員として働いていた頃から抱いていた素朴な疑問にある。それは、「日本の社会福祉の実践現場や教育現場ではなぜアメリカのソーシャルワーク理論ばかりが語られるのだらう」というものであった。

日本での社会福祉援助（ソーシャルワーク）の実践は、当然のことながら、その多くは日本人とその生活にかかわる営みである。そのためには、それらが日本人の生活現実に根ざした生活支援の実践や方法として、機

能し得るかどうかが重要であるすなわち、アメリカやイギリスから移入された横文字の「Social Work」ではなく、いわば平仮名の「ソーシャルワーク」がもっと語られなければならないと考えたのである。それは、決して海外のソーシャルワークの学びに意味がないというのではなく、日本の社会福祉現場の実践にとって「リアリティ」のあるソーシャルワークのあり方を語りたいというものであった。

本書では、日本人の生活および日本の社会福祉現場とそこの実践を見据え、そこから生み出される言葉によって、日本のソーシャルワークのあり方を描くことに取り組んだ。具体的には、日本人の日常生活を支えている「関係」や「場」の力に着目し日本のソーシャルワークの理論と実践のあり方としての「生活場モデル」を描くことを試みた日本の様々な社会福祉現場で働く実践者（ソーシャルワーカー）にも読んで欲しい一冊である。

著者より



英宝社
3,456円(税込)

英国地図製作と シェイクスピア演劇

勝山貴之(大学文学部教授) 著

一般に地図とは、ありのままの地形を、客観的に描き出したものだと考えられている。しかし、人が自然の形状を縮尺によつて紙面上に写そうとする時、そこには描く人間の考えが反映される。地図上に何を含め、何を省略するのかという判断を人が下した時、地図はもはや客観的なものではなく、主観的で修辭的なものとなる。各国の地図が、自国の都合に合わせて、国内の様子や他国との関係を描こうとするように、地図は客観的な事象よりも、製作者が思い描く国家像や世界観を映し出している。

英国の地図は、13世紀中頃から描かれるようになるが、本格的な地図製作は16世紀も後半になってからのことである。本書は、この時期の英国の地図製作とシェイクスピア演劇の関係を説明しようとしている。一見、地図と文学作品は、何ら関係のないもののように思えるかもしれない。しかし地図が当時の国家観や世界観を映し出していると考えれば、両者の間には様々な関係性が読み取れる。中央集権国家の樹立を、あるいは新大陸の植民地を視野にブリテン帝国の成立を夢見る君主の想いは、地図上にどのような形で表現されているのか。そしてそれらは、シェイクスピアの作品の中に、どのように投影されているのかなど、興味は尽きない。近年の文学研究は、隣接研究領域との交流が盛んである。この研究もまた、他分野の研究成果を取り入れることによって、新たな解釈の可能性を模索したものである。

著者より



思文閣出版
6,804円(税込)

幕末・維新の 西洋兵学と近代軍制

大村益次郎とその継承者
竹本知行(大学法学部助教授) 著

近年、巷では幕末・維新时期を扱った書籍やテレビ番組をよく目にする。それは来る2018年の「明治維新150周年」に向けた「業界」の動きの一つといっても良いだろう。もちろん筆者がそれを意識したわけではないが、禁門の変150周年となる2014年、拙著『幕末・維新の西洋兵学と近代軍制―大村益次郎とその継承者』を上梓した。本書は幕末・維新时期における日本の西洋兵学の受容に関する研究である。幕末・維新时期に始まる日本の近代化の歩みとは、

西欧特有の資本主義と国民国家システムを受け入れて、パワー・ポリティクスを基調とする国際政治において、まずは列強と対等な関係を確保することを課題とした。その一方で、統一国家の理念を「王政復古」という媒介を通じて示さねばならなかった点に新たな困難が存していた。それは、国民国家としての日本の独自性の追求と、欧米のそれへの平準化という相反する方向性という難問に他ならない。

その時代、先人たちは国際環境に自らをどのように位置付け、どのように西洋から兵学を受容し軍制を確立していったのか。本書では、「新発見」の史料なども用い、近代日本の国家形成と国民形成の推進に大きな役割を果たした軍隊の創設の軌跡の政治上の特性について論ずること、時代を縦に貫く時間軸と横に広がる地平において、「大村益次郎の思想と遺産」という視点から幕末・維新期の西洋兵学の歴史的位置を明らかにしている。

著者より



技術評論社
1,382円(税込)

情報倫理

― ネット時代のソーシャル・リテラシー ―

原田隆史(大学免許資格課程センター教授)・佐藤翔(大学免許資格課程センター助教)・岡部晋典(大学学習支援・教育開発センター助教) 他著

本書は、情報リテラシーに関する科目の教科書として使用できると同時に若い人々向けの読み物としても読めるようにという編集方針のもと、テクニカルライティングや図書館情報学を専門とする4名の共著で執筆したものです。近年の情報通信社会はソーシャルネットワークの充実やビッグデータの活用など、従来にも増して情報倫理が重要な状況になっています。このような状況の中では、情報リテラシーの分かりやすい教科書の必要性が増していると執筆陣は考

えました。そこで本書では文体を簡易にすることに留意するとともに、イラストや図表も多用し、読みやすいものとする心をかけています。内容面については、情報メディアの変遷、個人情報保護、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスやオープンデータといった、歴史的なトピックから最新の話題まで幅広く取り入れました。新しい技術に対しては、それを単純に規制する姿勢ではなく、利便性と危険性を理解し、把握した上で活用していこう、という方針を本書は貫いています。例えばSNSの持つリスクや写真メールが悪用された事例など、学生たちにとって気づきにくい、しかし身近に潜むリスクを豊富な実例をもとに説明しています。情報リテラシー関係の科目に限らず、大学初年次の講義の参考図書や、最近の情報技術の動向とそのメリット・デメリットを把握する読み物としてもお使いいただける図書になっていると自負しております。

著者より



学文社
2,484円(税込)

食ビジネスの おもてなし学

山上徹(女子大学名誉教授) 著

茶道に造詣の深い山上先生は京都観光の真髄に「主客同一」のおもてなしがあることを看破され、そこから独創的な京都学を彫琢されてきました。

12章からなる本書の主眼に置かれているのは、顧客に対するサービスや接客態度をホスピタリティと解する一般的な見解を超えて、ホストとゲストが「同じ目線」(Win-Winの目線)で対応する共創関係の構築が目指されていることです(第1章)。この視点から無形文化遺産となった和食ビジネスの現状と発展への提言がなされています。

店舗や食材などの「ハード面」

が作り出す清潔・快適な空間と美味しい料理(物質的文化)モノ、素材の物流安定や料理人のワザなどの「ソフト面」が作り出す安全・安心な調理システム(制度的文化)コト、接客スタッフの先回りの気づきなどの「ビューマン面」が作り出す楽しい語らいとコミュニケーション(精神的文化)ヒトの3つの側面からなる総合的なおもてなし力」が和食ビジネスの強みである(第8章)。そこから、「挨拶」「お辞儀」「笑顔」の教育・訓練・自己啓発が必須であること(第2章)、和食ビジネスが「モノ」の輸出「や」制度的文化のサービス輸出「段階を超えておもてなし精神文化の輸出」段階にある現在(第9章)では、「手食」「箸食」「フオーク食」に対応する必要がある(第11章)、イスラムのハラール認証が課題となっていること(第12章)などを指摘している。

山上先生の長年の研究成果が随所でうかがわれる本書は、和食ビジネス関係者の教導書としても読まれるべきであると思われる。

河野健男(女子大学現代社会学部教授)



雇用開発センター
1,400円(税込)

影山教授の教え子が泣きにくる。

涙が笑顔にかわる京都の女子大研究室
影山貴彦(女子大学文学部教授) 著

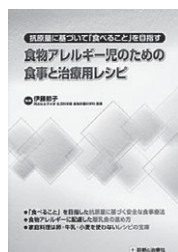
大学の研究室に教え子が相談にやってくる。講義内容の質問とか、テストや論文、レポートに関することが多いだろう、と読者は思われるかもしれない。もちろん、その種のことも少なくはない。けれど、実はそれ以外のことがとても多い。内容は、アルバイトのこと、サークルでの人間関係、就職活動のこと、友人関係、家族問題、恋愛相談、将来の自らの人生設計に至るまで、大げさでなく、さまざまなジャンルに渡るのだ。

平均して月に2回程度、研究室で彼女たちの涙に出会う。こ

くごく平凡に人生を歩んできた「オッサン」なので、放送マンから職を転じて間もなき頃は、女子大生の涙にかなり狼狽したものだ。月日は流れ、大学教員生活も14年目となった現在では、さすがに慌てふためくことは少なくなったが、それでも慣れるということはない。その都度教え子の涙と不器用に向かい合う。ドラマのような気の利いたセリフでアドバイスできることなど極めて稀で、ただひたすら彼女たちの話に真剣に耳を傾ける。心理学の専門家でも、その道のプロでもない自分に出るの、結局それだけだと確信しているからだ。

不思議なことに、話を聞くにつれ、教え子の涙はやがて渇き、研究室を出る頃には、それは多くの場合笑顔にかわっている。研究室で紡がれた涙から笑顔への話のいくつかを本書に綴った。そして、それはもしかすると皆さんお一人ひとりの物語かもしれない、と思っている。

著者より



診断と治療社
4,536円(税込)

食物アレルギー児のための食事と治療レシピ

伊藤節子(女子大学生活科学部) 著

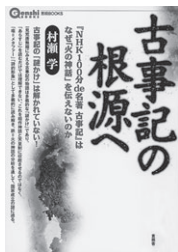
本書は、30年以上にわたる食物アレルギー児の診療経験から得られたデータをもとに、食物アレルギーの診断から治療まで述べた抗原量に基づいて「食べることを目指す」「乳幼児の食物アレルギー」(診断と治療社、2012年9月)の続編として書いたものである。

食物アレルギーの治療は、正しい抗原診断に基づく必要最小限の食品除去からスタートするが、その目的は安全に「食べること」である。四季のある日本において食物アレルギー児のための食事作りを容易にするコツ

は旬の食材を活かして昆布・鰹節の出汁をベースに醤油・味噌、ウスターソース、トマトケチャップなどの基本的な調味料を用いた家庭料理を基本とすることである。食物アレルギーに配慮した食事は生活習慣病予防にも役立つ食事でもあることは2012年8月に刊行した「親と子の食物アレルギー」(講談社現代新書)にも書いた通りである。

本書では、卵、牛乳、小麦アレルギー児に対して診療の場で行っている「食べる」側からみた抗原量に基づく食事指導の実際を具体的に示した。最重症の食物アレルギー児でも抗原タンパク質量を把握することにより、安全に「食べる」ことができる量を設定し、ここからスタートして計画的に摂取タンパク質量を漸増していく治療(経口免疫療法)により耐性を獲得して「食べる」ことが可能となる。本書が食物アレルギー児が安全に「食べることを目指した治療を受けるための参考となれば幸いである。

著者より



言視舎
1,296円(税込)

古事記の根源へ

『NHK100分de名著
古事記』はなぜ「火の神話」を伝えないのか

村瀬学(女子大学生活科学部教授) 著

古事記は、金属の武器を使い、倭国を「日本」と呼ぶ統一国家に作り上げたその動乱の時代を「物語」として描いたものでした。「国作り」が「金属作り」と共にあったわけですが、なぜか、従来から古事記というと「国作り」を「稲作り」と重ねた物語だと説明されてきました。最近の三浦佑之氏の『NHK100分de名著古事記』でも、旧来の「稲作神話」として古事記を読む見方で読者に説明しています。本当にそういう理解でいいのかを、この本では根本的に疑問視し追求

しています。古事記を稲作神話と読むと、天皇の大嘗祭や新嘗祭などの儀式と結びつけやすく、古事記を天皇を讃える物語だとする見方をいつも陰で支える役目をしてきました。しかし、古

事記は稲作の物語だけではなく、金属の武器を手に入れる物語であり、金属の光をアマテラスのような光る神に置き換える物語であり、そうした武器と光(宗教)を手に入れた一豪族が、地方の豪族を武力と光力で制圧して中央集権の王になってゆくところを描いた物語でもあったのです。きちんと読めば、古事記の神々は、ほとんどが金属の神々であり、その金属の特徴を持つが故に、武力ややり事、敵対する神々を次々に征服してゆくところをよく描いています。そして、そういう武力とはかり事の争いは、金属を頼りにして生きている現代の私たちのあり方と重ねて読み取ることのできるものだというのが、この本の根本の主張になっています。

著者より



実業之日本社出版
918円(税込)

阪急沿線の不思議と謎

天野太郎(女子大学現代学) 監修

本書は、実業之日本社の鉄道沿線シリーズの一環として、関西地方の鉄道会社としてまず最初に阪急電鉄をとりあげたものとして出版された。関西の地域形成史における私鉄の役割を考えた場合、まず第一に挙げられるのが阪急電鉄の存在である。

阪急電鉄の創始者である小林一三は、鉄道沿線に日本で最初の郊外住宅地を建設して阪神間の住宅地形成に大きな役割を果たした。さらに起点となるターミナル駅に世界で最初の百貨店を運営し、終点には遊園地や宝塚大劇場などの文化施設を建設す

るなど、阪急文化圏ともよばれる地域形成に大きな足跡を残してきた。

監修者は女子大学の現代社会学部社会システム学科において、京都学・観光学コースに所属し、教育・研究活動を行っている。地理学・観光学といった専門性を活かし、よくある「鉄道本」に見られがちな車両を中心とした鉄道施設に焦点を当てるのではなく、鉄道が地域形成にどのような影響を与えてきたのか、その沿線に関連する観光資源をふくめた地域の特徴を描き出すことを目的として作成した。また地図を多用しながら、実際に現地を訪問したくなるような構成を心がけた。

研究書ではなく、あくまでも一般的な文庫本である。ただそれであるがゆえに、多くの人々に鉄道会社と地域形成の関係を知ってもらい、平易なカタチで地域研究や観光学の一端に関心を持ってもらえる契機になれば幸いである。

著者より